なぜ人はUFOをエイリアンクラフトにしてしまうのか？

皆神龍太郎

2026年7月7日発行

「UFO」とは、「Unidentified Flying Object（未確認飛行物体）」の略語である。この言葉は「正体は未確認である」という客観的事実を示しているにすぎない。しかし、私たちの社会において「UFO」というと、しばしば暗黙のうちに「空飛ぶ円盤」や「宇宙人の乗り物（エイリアン・クラフト）」とほぼ同義として扱われてしまっている。なぜ人々は、「正体がわからない飛行物体」を、短絡的に「宇宙人の乗り物」だと断定してしまうのだろうか。その背景には、言葉の定義の曖昧さと、人間の認識能力の限界、そして未知へのロマンが複雑に絡み合っている。

まず、UFOという言葉の歴史と定義を振り返ってみよう。「UFO」という用語は、米空軍のUFO調査機関「プロジェクト・ブルーブック」の機関長を務めたエドワード・J・ルッペルト大尉が、それまで使われていた「空飛ぶ円盤」などに代わる言葉として公式に採用したものである。ルッペルトが「空飛ぶ円盤（フライング・ソーサー）」を、軍事用語として「UFO」とわざわざ書き換えたのは、「空飛ぶ円盤」が「宇宙人の乗り物」という意味に使われすぎてしまい、余りに手垢が付いていたからだった。だが折角言い換えた用語「UFO」も、世の中で使われていくうちに、すぐ同じ手垢が付いていった。

ルッペルトが当初定めた「UFO」という単語の定義は非常に広く、「空を飛んでいる何物かを目撃し、その正体が何なのかわからなければ、例えその正体が後に飛行機だったと分かっても、目撃時点では謎の飛行物体を『UFO』と呼んでも間違いではない」というようなものだった。つまり、観察者にとって正体不明であれば、後からその正体が気象現象や人工物だと判明しても、判定するまでの間は、謎の物体は立派な「UFO」でよかった。この「正体がわからないもののことを、とりあえずUFOと呼んでおこう」というシステムが、後々「UFO＝エイリアン・クラフト」という誤解を世間に定着させる一因ともなった。

では、実際にUFOとして報告されてきたものの正体は、何だったのか。米空軍の内部に世知されていたUFO調査期間「プロジェクト・ブルーブック」の結論は、「UFO目撃の95％は誤認」というものだった。またUFO調査研究のパイオニアで「UFO学の父」とも呼ばれるJ・アレン・ハイネック博士は、データ不足だったケースを除けば、真に未解決のUFO事例は数パーセントと述べている。また、米国のUFO研究家アラン・ヘンドリイが米国で起きた1307件のUFO目撃報告を詳細に調査したところ、最後まで正体がわからないUFOはわずか1.5％しかなかったと公表している。

ヘンドリイの調査によれば、判明したUFOの正体として最も多かったものは、恒星や惑星（35.2％）であり、次いで広告用飛行機や通常の航空機（19.1％）、隕石（11.0％）と続く。驚くべきことに、警察官やパイロットといった、空の観察に慣れているはずのプロフェッショナルの人々でさえも、見間違いを多く起こしている。例えば、1967年にジョージア州の警察官が数日間にわたって「フットボールのような形をした明るい赤色の物体」をパトカーに乗って追跡したという事例がある。警察官たちはUFOが「木の高さまできて色を変

化させながら急上昇していった」と詳細に報告していたが、天文学者らが現場に急行し確認したところ、その正体はただの「金星」であったことが判明している。

さらに、夜間に機体の下部でネオンサインを点滅させながら飛ぶ広告用飛行機を見た人々は、その姿を「まるでマグネシウムが燃えているような輝きだった」「猛スピードで飛んでいった」と UFO を目撃したと大袈裟に報告してきた。さらには、ただの光の点を見たのに「ドームのついた円盤型」だったとか「タバコ型」だったなど、存在しない UFO の形状を具体的に描き出し報告されたケースもあった。これは、目撃者の頭の中に「UFO とはこういう形をしているはずだ」という先入観に基づく強いイメージが先行して植え込まれていて、見慣れない光を見た瞬間に、そのイメージで現実を補完してしまっていることを示している。

このように、人間が空に見えるものを一つ残らず正確に見分けることはそもそも不可能であり、誤認は日常的に起こり得る。しかし、人は「自分が見たものの正体がわからない」という事実を、そのまま受け入れることが非常に苦手なのである。そして、「たしかにこの目で見た。決して嘘ではない」という自らの視覚体験への強い確信が、「だから、あれは宇宙人の乗り物なのだ」という極端な結論へと飛躍させてしまうのである。

この「自分の見たと思う不思議な空中現象」と「宇宙人が存在している」という事実の間には、とても深い論理の溝があるはずなのだが、この溝を人々は、なぜか身軽に飛び越えてしまう。

UFO 肯定派の中には、「95%が星や飛行機の誤認だとしても、残りの 5%の正体不明の事例がある以上、エイリアン・クラフトは存在する」と主張する人々もいる。しかし、これも論理的な誤謬だ。「正体がわからない」ということは、文字通り「現在のデータや知識では正体を教えてくれない」という不可知の状態を示しているにすぎず、「正体がわからないから、それは宇宙人の乗り物である」という証明には一切ならない。

筆者はこの論法を「タヌキが化けた茶釜」によく例えて説明している。「飛行物体の正体が分からないというなら、それが宇宙人の乗り物ではない、とも言い切れないはずだ」といった主張がもし通るのなら、「正体不明である以上、タヌキが化けた茶釜が空を飛んでいるのだ」という主張もなんら否定できなくなるはずだから。つまり、任意のなんでもいい「X（宇宙人の乗り物）」を勝手に持ち出し、X の実在は否定できないと主張する論理にすぎない。つまり X に好きなものを入れれば、なんでも成り立ってしまう無敵の屁理屈だ。

人が UFO をエイリアン・クラフトにしてしまう最大の理由は、人間の認識の不完全さと、未知のものに対する過剰な意味づけの欲求にある。

夜空に輝く不可解な光を、単なる「金星」や「広告用飛行機」として処理するよりも、「高度な文明を持つ宇宙人の乗り物」だと解釈する方が、はるかに刺激的でロマンに溢れている気がするからだ。しかし、真実は往々にして、かなり地味である。私たちが空に「UFO」を見たと思い込んだとき、宇宙人の存在を信じ込む前に、まずは自分自身の目と脳が起こした「見間違い」の可能性を冷静に疑ってみる必要があるだろう。何しろ過去の各種 UFO 調査によれば、その 95%は単なる見間違いなのだから。

2026 年 7 月 7 日

皆神龍太郎